

中井 義明 著

『古代ギリシア史における帝国と都市』

—— ペルシア・アテナイ・スパルタ ——

ミネルヴァ書房 2005年3月発行 6,000円

木本英則

本書は、中井氏が立命館大学に提出した学位請求論文を基とし、序章・第一章・第二章・第三章・終章で構成されている。

序章では、課題が明記されている。その課題とは、ペルシア帝国やアテナイ帝国、さらにはスパルタ帝国といった古代ギリシア諸都市が直面した帝国に対するギリシア人たちの対応についてである。また、本書において、中心となる分析項目として設定されているのが、古典期のギリシア政治史の中で重要な役割を果たしてきた党派である。中井氏は、大きな論点の一つとして、紀元前6世紀から4世紀を通じてギリシア世界の内外に現れた様々な帝国に対してポリスの分裂状況とポリス内部の党派間の権力闘争がどのように連動しあっているのかという部分に注目し、さらにそこから派生する諸問題にも焦点をあてることを明記している。本書における評価の基本的な枠組みは、ギリシア人全体の利害が個別のポリスの利害の延長線上に位置づけられ、ポリスの利害が党派の利害に準拠するという視点からなっている。中井氏は、古代ギリシア人が決して教条主義者ではなく、国際場裏における現実に対する柔軟な対応こそがギリシア人の政治的信条であると考えているのだ。

第一章は、「ペルシア帝国」である。まず「ギリシア人とリュディア人」では、リュディアとギリシア人の関係について書かれている。その中で中井氏は、ギリシア人の異民族観にも触れ、当時のギリシア人が文化的優越性と差別意識をもってリュディアと接することはなかったと主張している。さらに、オリエントに対するギリシアの影響を過大に評価する傾向が近代の歴史家にはあったとも主張している。「イオニア反乱の原因」では、イオニア反乱の原因について書かれている。ここではイオニア反乱についての近年の研究動向についても詳しく触れられている。そして、氏はイオニア

の反乱が僭主制の打倒を目的とする大衆の革命ではなく、ダレイオスの下で権力を支えてきた有力者たちのクーデタにすぎなかった、と結論づけている。「ペルシア戦争は自由のための戦いか」では、ペルシア戦争の再評価を通じて、ギリシアのポリスが当初からペルシアをギリシアの自由への脅威と見なしていたわけではなかったとしている。そして、「自由のための戦い」はごく一握りのポリスの戦いであったとしている。「パウサニ阿斯事件」では、スパルタの指揮官であったパウサニ阿斯が起こした事件に関するトゥキュディデスの記述の問題点を検討し、その信憑性について考察し、事件の持つ意味を評価している。そして、パウサニ阿斯事件はアテナイによる指導権や帝国支配の過程において利用され続けられたもので、トゥキュディデスはそのアテナイ人の認識を援用したのである、としている。

第二章は「アテナイ帝国」である。「アリストイデスの査定」では、都市の抛出金である貢税の査定額（文献史料）と納付額（碑文史料）に差が生じることから、どちらかが間違っているのではないか、という議論に目を向けている。また、査定の方法についても触れ、「アリストイデスの査定」についての評価がなされている。「アテナイ帝国と神話、祭典そして支配」では、アテナイが神話を同盟諸国に対する支配の正当化に利用したということが論じられている。そして、同盟諸国をアテナイの植民市に位置付け、血縁関係による繋がりを強調したが、同盟の崩壊を止めることはできなかったとしている。「レスボスの離反」では、事件の概要から研究史を紹介し、その分析を通じてレスボスの離反においてどのような党派関係が見られるかという点について論じ、民衆の反抗をどのように評価できるのかという点を最後に論じている。

第三章は「スパルタ帝国」であり、中井氏が二十年以上前に行った論考を元に行っている。「紀元前五五〇年代におけるスパルタの対外政策の転換」では、前六世紀前半のテゲアとの戦争におけるその性格の変化から、今日スパルタが政策転換を行ったと見なされる。ここでは未だ見解が一致しないその原因の解明を課題としている。「スパルタの不評とスパルタ帝国」では、スパルタに対する感情を批判・不評的な視点から広く考察し、スパルタに対する評価を行っている。「エーリス戦争とスパルタ」では、スパルタのヘゲモニーのための戦争の一つであるエーリス戦争に焦点をあて、その戦争原因について分析を行い、そのうえでエーリス戦争に関する評価を行っている。そして、スパルタに対する非難がスパルタのヘゲモニーを脅威と感じた、弱小諸都市を支配する強国によってなされたのだと結論づけている。「コリントス戦争の原因」では、古代ギリシアの政治史上の一大転換点であるコリントス戦争の原因に焦点をあて、史料より戦争責任に関する古代人の見解を分析し、各陣営の党派の分析を行い各交戦国の動機や状況について論じている。「スパルタ帝国再考」は、これまで述べて

きた「スパルタ帝国」に関する論考が、すでに時代遅れであるとの判断から、その後のスパルタ史研究についてそれぞれのテーマに即してまとめられている。そして最後には中井氏が現在関心を抱いているレウクトラの敗戦からペロポネソス同盟の解体に至るまでのスパルタ史について書かれている。

終章「帝国・都市・党派」においては、古代ギリシアにおける帝国および帝国主義という言葉の使用に関する考えを述べている。その上で党派とは何なのか、いかに帝国と接点を持っていたのかを論じている。そして、それぞれの章・節ごとにまとめを述べて締め括っている。